
— —Ancestor's retrospect **《神の追憶》** — —

金剛石

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

— Ancestors' retrospect — 《神の追

憶》

【Nコード】

N7181I

【作者名】

金剛石

【あらすじ】

— 私はアメリカに降り立った —

これは今から四十六年昔に遡った物語。あなたは、現実世界にフアンタジーを見出だす。

(前書き)

とある掟より

——我々には運命を変えることはできない。それがそうなるべきものであるなら。

我々が運命を変えるときとは、“世界”が滅びの危機さらされている時のみ。

我々には運命を変えることはできない。それを見届けることはできても——

今日から四十六年前、何が起ったかあなたはご存知だろうか？

あなたは不思議な人だ。

私の目の前にいる人物が言った。アイルランド系の人間で、高価そうなスーツを身につけている。人格からか、威厳が溢れ出ていた。「悪かったな。胡散臭い奴で」

私は軽くため息をついて答える。たまたま夜道を歩いていて出会ったのがこの男だった。それで話しかけられた訳だが、彼はサラリーマンのような格好をしているにも関わらず、強い存在が感じられる。ただ者ではなさそうだ。

「いや、けなしているわけではない」

彼はそう言つて軽く笑つた。そして、無数の星が瞬いている空を見上げる。白く輝く星、赤く輝く星、闇を飾るイルミネーションが、私達を静かに見下ろしていた。

「仕事ばかりだと疲れるんでね。天気がいい日の夜は、たまにこうして星を見に散歩している」

「あんたも、そんなことをするあたり、充分不思議な奴だと思うが」私は彼にそう言い返した。十一月も半ばで、身を刺すような冷風が吹き抜けていく。彼はぶるつと身を震わせると、近くにあったベンチを指差した。

「そのベンチに掛けないか？」

私達はしばらく黙つたまま、星空をただ眺めていた。時折、数台の車が風を切つて前を通り過ぎていく。唸りを上げるエンジンの音が、一時の間沈黙を引き裂き、遠ざかつては消えていく。そして、また辺りは静寂が支配する夜となる。

世の中はややこしい——と彼が切り出した。

「経済は不安定だったり、ソ連との対立があったり。黒人の差別や核実験などの廃止すべきものがごろごろ転がっていた。今はいくつか解決されたが……時が過ぎれば、また新たな問題が出てくる」

「確かにそうだな。そういうことがあるから人間は頭がいいのか、馬鹿なのか分からなくなる」

私達の吐息が、ベンチの近くにある街灯の明かりで白く浮き上がる。

私の言を聞いた彼は、苦笑いしてこちらに視線を移した。

「やっぱりあなたは不思議な人だ。失礼かもしれないが、人間ではない別の存在のような気がする」

私は内心で彼の洞察力の鋭さに驚いた。今までにも、勘の優れた者が私を『人間ではない』と言ってきたが、その数は決して多くはない。

「人間ではないとはずいぶんな評価だな」

「いやいや、悪い意味ではない。人間を超越する存在だと言ったんだ」

「例えば何だ？」

「神だとか」

私は空から目を離し、こちらをじつと見つめる彼の眼差しを正面から見据えた。彼の視線は、あたかも『そうだろう？』と問い掛けてくるかのようなだった。

「神はいると思うか？」

私は再び星空を見上げ、彼に尋ねる。北の方に、淡い光を発する北極星が見受けられた。

「神はいると思うか、か。私はカトリック教徒だから、こう言うのもなんだが……」

あなたが神だろう？ 彼のその問いに、私は答えず、ただ黙ってポラリスのある北の空を観察していた。

「イギリスの著述家、トーマス・カーライルの名言に『雄弁は銀、沈黙は金』とある。沈黙は全てを語る。あなたは神だろう？ イスラム教のアッラーや、ヒンドウー教のシヴァ神を始めとする三大神などとは違う、神。そうだろう？」

「ローマのセネカとやらも、カーライルと似たようなことを言っていたが」

「あなたはどんな人物に出会ってきた？ どんな歴史を見てきた？」

「歴史は変えられない。それを見届けることはできても」

彼は私の目を矢のように鋭く見据えながら問うた。

「未来は見えるのか？ 教えてくれ。世界がどうなるのかを……私の未来を」

彼の焦燥に駆られた眼差しは、私を貫くかのように、そして、切実に未来を知りたいという好奇心と不安に溢れ返っていた。

「未来は見えない。それがどうなるのか見届けることはできても」

「あなたが見届けてきた過去は何がある？ 教えてくれ」

彼は勢い込んでそう尋ねてきた。

私は目をつぶった。私が見てきた過去が、次々とまぶたの裏に蘇る。私は、その一つ一つ並べ上げた。

——戦場の空に散った飛行士、一瞬で全てが焼け野原になった業火

——群雄達の覇権をかけた争い

——フランスで起きた革命

——国のために武器をとった少女の末路

——売り出され、虐げられる奴隷達

——ルネサンスで生み出された天才画家

——並び立つ三国、その一国を支えた天才軍師

——妻と母を殺し、街を大火災に陥れた暴君

——バビロンの栄枯盛衰^{えいこせいすい}

——トロイの壮絶な戦争

——文明の誕生

——人間の誕生

——生物の誕生

——この“世界”の誕生

——全てを見届けてきた

私は息をつき、口を閉じた。そして、最後に一言、心の中で付け足した。

——私は“Ancestor（始祖^{しそ}）”だ——

「私は私の夢を叶えてみせる。あなたはそれを見届けてくれるか？」
彼はそう言って立ち上がる。顔はどこか悲しげだった。

「あなたとはどうやら気が合うようだ。未来は知りたかったが……」

それは自分の目で見ることにする」

彼は後ろの私を振り返らずに去っていく。一步一步、闇に消えていくその姿は、やはり威厳に満ち、そして力強かった。

「未来は見えない。それがどうなるのか見届けることはできても」

私は夜空のポリリスに向かって、囁くように言った。星はそれに応えるかのように、静かに瞬いていた。

私は彼との約束の場所へやって来た。この町での彼の仕事が終われば、私が直接彼に会いに行くことになっているのだ。何でも、私が見てきた過去の話を知りたいらしい。

私は、彼が車に乗って通るとされる道に行った。道の両脇には、言葉を失うほど大勢の人間が集まっていた。辺りは人々の歓声のうねりに包まれている。まるで祭か何かのような熱狂ぶりだ。

群衆の中に紛れこんでいた私は、ふとただならぬ殺気を感じた。この人々の歓喜に似つかわしくない、憎しみと殺意のこもった感情。私は、その感情が発せられている所を探した。“力”を使い、辺りの感情の色を識別する。

そして、私は負の感情の根源の一つを見つけた。そこからは、黒々とした禍々しい闇が溢れ出している。

その闇が溢れ出しているのは、近くにあったビルの六階の窓からだった。

道の向こうから、彼の乗った車がゆっくりと進んできた。車には、二組の夫婦が乗っている。そのうち一組は彼とその妻だ。私の回りには群衆は、さらに盛大な歓声の渦を巻き起こす。あまりの高音

響に、体がびりびりと震えた。

彼が私の前を通り掛かったとき、私は彼と目が合った。希望と夢。彼の顔は喜びに満ち溢れ、笑っていた。

ビルの六階の窓が静かに開き、黒光りする銃口が現れた。辺りに紛れている殺気が一段と強くなる。その負の感情は噴火寸前の火山のように、今にも解き放たれようとしていた。

この殺気に、群衆の誰もが気づかなかった。皆はただ、喜びに身を踊らせていた。

私は、群衆に手を振って応えている彼に背を向けた。そして、ゆっくりと群衆から、彼から遠ざかっていく。

——あなたは神だろうか？

彼の問いが頭をよぎる。結局、彼のその質問には答えずじまいだった。

私の背後で、複数の銃声が一斉に轟いた。途端に群衆の歓声が、恐怖におののく悲鳴へと変貌する。混乱が津波のように辺りを呑み込み、その場が地獄と化す。

私に歴史は変えられない。運命は変えられないのだ。それを見届けることはできても。

彼の夢は儚く散る。はかな

結局、彼にとって、私は終始胡散臭い奴でしかなかった。

彼は私との対話を心底楽しみにしていたが……

彼は過去のことから何を知りたかったのだろうか。

「あんたの運命は見届けた」

私は北の空を見上げて、話しかける。

短い付き合いだったが、彼のことはかなり気に入っていた。

しかし、離別とは突然やって来るものらしい。

「最後に質問にでも答えておこう」

深呼吸するように、息を整える。

「私は――」

真昼だと言うのに、ポラリスが明るく瞬いたように感じた。

1963年11月22日

第35代アメリカ大統領 J・F・ケネディ暗殺事件発生。

そのニュースは世界中を震撼させ、歴史を大きく揺り動かした。

ケネディを暗殺したとされるリー・ハーヴェイ・オズワルドは、逮捕二日後、ダラス警察署の地下でテレビ中継中にジャック・レオン・ルビーによって射殺される。

様々な推理や議論がなされる中、事件は闇に葬られた。

2039年、事件の真実が明かされる。

（後書き）

この物語は、事実を元にしたフィクションです。また、作者がこの事件について調べたことで誤りがある可能性もあります。ご了承ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7181i/>

――Ancestor's retrospect 《神の追憶》――

2010年10月9日21時18分発行